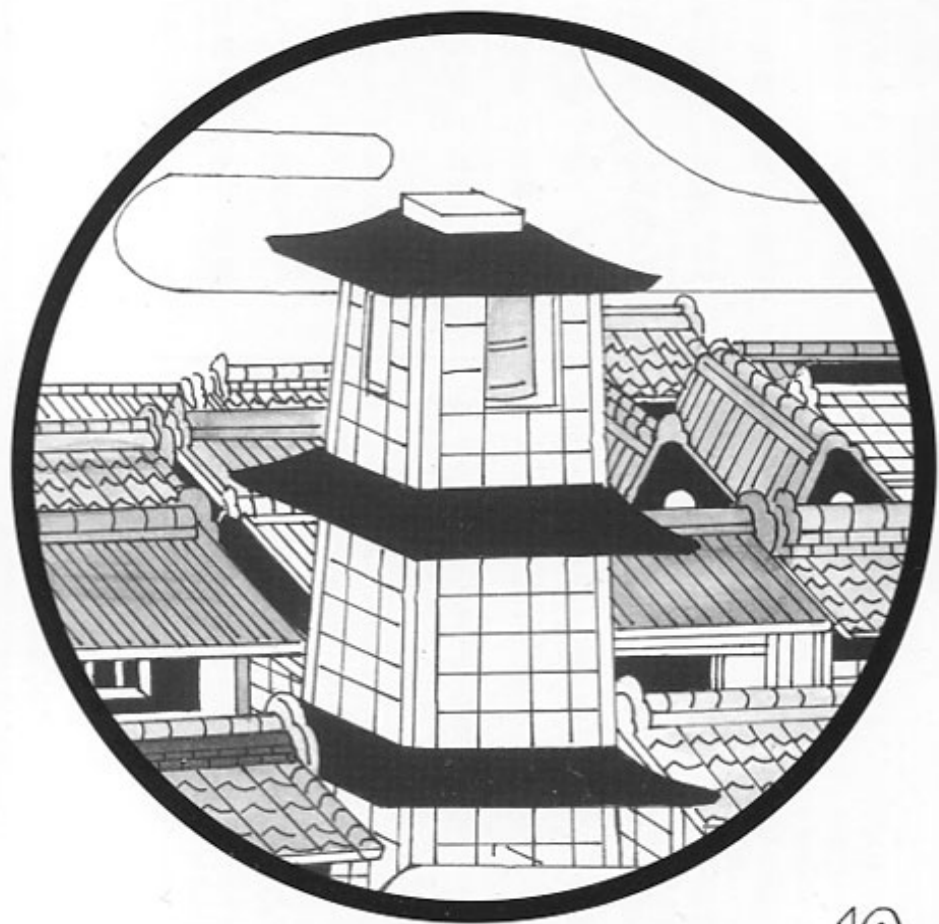


# 風土



## ほととぎす 獺には遣れぬ 夢の覺め

(句集『竹取』より昭和四十一年作)

年譜に拠るとこの年より「竹の子句会」を神蔵器師の実兄、神蔵購成邸に移し、以後同所での恒例行事となる。あり、器師と親密な関係にあることが解ります。「竹の子句会」は五月末です。この句はその頃のもので、「獲」は中国では人の悪夢を食べると伝えられています。「遣れぬ夢」とありますので良き夢だったのでしょう。夏の使者の「ほととぎす」の声に且覚めつつ。

## 苗代や 晝餉を蕎麦ときめし 徑

(句集『竹取』より昭和四十一年作)

桂郎師の七疊小屋の周りには田畑が広がっています。原稿の仕事を一休みして、昼は「蕎麦」にしようと決めました。桂郎師の「蕎麦好き」は有名です。行きつけの蕎麦屋へ行くのに、いつもの田に沿った小道を歩きます。田のあちこちにはや「苗代」が見られ、農家の人々の田植の準備が着々と進んでいます。「苗代や」の詠嘆に桂郎師の農への親近感が伝わります。

## 大太鼓海へぶつけて祭果つ

(句集『木守』より昭和五十九年作)

この句、旅先の海沿いの祭を描いたものです。器師の表現の特徴として素材を切り詰め大胆なことばで、読み手に作品世界を想像させるというのがあります。それが「海へぶつけて」です。まず「海へ」で海に真向いに「大太鼓」が据えられているのが解ります。また「ぶつけて」で、身体をぶつけるように撥を叩く漢を想像します。力の限りの最後の一打は海と拮抗せんばかりにひびき渡ります。雄々しい世界が現出しています。

## 葉牡丹の渦の芯より眼ぬく

(句集『木守』より昭和五十九年作)

「葉牡丹」はキャベツの一種を改良したもので、紅紫や白色の葉が渦を巻いて、ちょうど牡丹の花のような風情があります。花の少ない冬季に貴重です。さてこの句にも「眼ぬく」という大胆なことばが登場します。事実は「葉牡丹」を眺め入ってそこから眼を離れただけですが、「眼ぬく」と置くことで、葉牡丹の渦に吸い込まれるように魅入られた心情というものが伝わります。

下駄履きしまま

南うみを

夏祓果てし鎮守の葉擦れかな

しらはえに飛び立つばかり杜の幣

萍を寄せては畦に擲てり

草刈機わめきちらしつ畦を撫づ

鉄塔の走りだしたる青田波

肘の位置決め立ち呑みの生ビール  
ひとつ抜き柿の葉鮓の箱ゆるぶ  
のうぜんのくわつと河童忌の真昼  
滝しぶきか雨かと少しあとずさる  
早稲咲くと鼻がむずむずしてきたる  
悼 遠く若狭にて  
師の訃来るひぐらし谷の深きより  
下駄履きしまま秋風にまぎれしか



# 竹間集

同人作品



海の日

門伝史会

地のほてり叩き出したる驟雨かな  
種とばす縁側なくて大西瓜  
海の日突然のご逝去の十四階に師を見舞ふ  
焼岳突然のご逝去の雲の峰より師の訃報  
夏霧こめ師を見失ふ森の中  
橋涼し穂高連峰真向ひに  
晩夏光ひとつ拾ひし川原石

「老樹」以後(四十二)

野沢しの武

老い達の体操合はずして残暑  
鰯雲淋しくなれば空を見て  
鬼灯われ一歳時にや十六歳にて姉嫁きしよ  
海の日われ一歳時にの自転車海に向け憩ふ  
妻逝きてより鉄線花の白を見ず  
亡き妻の分のメロンも切つてしまふ  
雨の日は夕刊遅し濃紫陽花

雲の峰

鈴木 石花

パリー祭「オオシャンゼリゼ」合唱す  
仙人岳より観音山へ虹の橋  
往年の社業思ほゆ草いきれ  
未だ子に従ふ気無し雲の峰  
「今のまま」願ふ短冊星祭  
方丈の葬列長し薄衣  
葬果てて真珠の玉の汗拭ふ

夏帽子

山田 暢子

夏帽子心はずでに汽車に乗る  
海開き鷗も祝詞を聴きに来る  
炎天を来て冷たきは足のうら  
金魚の死それだけのこと一日過ぐ  
片陰を来て片陰へ路地曲がる  
泣くことを忘れてをりし盆支度  
涼しさや空に星座を溢れしめ

月下美人

岩木 茂

午前零時の月下美人の香の多感  
噴水の虹をくぐりてチェックイン  
手火花のあと釣人の来る波止場  
海の日の松に潜水服干され  
塩田に海の日の海平らなり  
星合や備前の陶にワイン注ぎ  
青鬼灯良辨ここに生を享け

ほととぎす

小林 輝子

萱草の花こぞり立つ岐神  
風の寄るまで鷺草に屈みけり  
庭先に来て鳴きくれしほととぎす  
空蟬を拾へば零れ昨夜の雨  
蛍のゆらゆらと翔ちはたと落つ  
パソコンに対ふ俳人お風入れ  
甚平の中身もともに褪せにけり

美ら海

田村すゝむ

梅雨暑し回り舞台の裏表  
幸不幸乗せて声なし流灯会  
風去つて紺の美ら海雲の峰  
ホームより登り始る登山駅  
エンヤラー四辻に鉾の仁王立ち  
駆け込みて一と幕見席の扇子かな  
でで虫や未だ書かずゐる遺言書

星 合

田中佐知子

金婚のあとの日月紫蘇を揉む  
明けに着く一番札所酔芙蓉  
まどろみの覚めて故郷や合歓の花  
雨あとの夜空の紅し星祭  
短冊を結ひ七夕の露こぼす  
師に逢ひに七夕の橋渡るかな  
群衆の誰も寂しき揚花火





# 山河集

同人作品



南うみを選

白桃に一点の創あらば捨つ 豎山 道助

峰雲や横綱が注ぐ力水  
献杯はアルコール抜き群青忌  
水槽の金魚見詰むる執行官  
雲海を裂くや眼下にニューヨーク

津川かほる

「爆発だ」太郎の拳雲の峰  
咲けばすぐ蛾とたはむれて烏瓜  
薔薇アーチくぐりプラハのピアガーデン  
兜虫戦はせては実況す  
襲ひたる後の静けさ蟻地獄

池田 光子

柵をぬけてまつすぐ蛇泳ぐ  
バケツごと鉄砲百合をもらひけり  
人に酔ひ祇園贈囃子に酔ふ今宵

青田風玉葱小屋にぶつつかる  
初蟬のはじめのこ糸のつまづきぬ

渡辺 やや

鉾立てや漢の声の入り乱れ  
紫に昏れて宵山灯の入る  
馬の足高さばらばら夏芝居  
帰省子の一日は母と鍼を持つ  
あぢさみをぐらりと分けて宅配便

川田 好子

梯子かけ西日剪りとする庭師かな  
老庭師蚊遣りを腰に風立たす  
米穀通帳文筥にねむる紙魚抱きて  
炎昼のしじま切り裂く救急車  
韋駄天にかけのぼりたし雲の峰

# 風土独語／南 うみを



白桃に一点の創あらば捨つ

豎山 道助

この句の強い断定に、安藤次男の「てつせんのほか蔓ものを愛さずに」を想い起しました。「白桃」の肌への作者の過剰な美意識が「捨つ」という潔いことばを生んだのです。

骨灰の付きしハンカチそのままに

山田 健太

焼いたお骨のどの部分か。作者にとつて大事なそれを一度ハンカチに乗せたのです。「そのまま」に亡くなった人との深い関係が伝わります。「ハンカチ」の意外な表情が現出しています。

咲けばすぐ蛾とたはむれて烏瓜

津川かほる

烏瓜は夕方に咲いて朝方にはしぼみます。闇に浮かぶ白いレーヌ状の花は幻想的です。「蛾とたはむれて」に、闇にまぎれてもてあそぶ妖艶な女性像が重なります。

移したる墓を晩夏の風わたる

赤石 梨花

父祖の墓を一つにまとめ、移すのは継ぐものにとつて一大事業です。成し終えた墓に佇み、万感の想いで「晩夏の風」に吹かれている作者が見えます。

柵をぬけてまつすぐ蛇泳ぐ

池田 光子

「柵」は「しがらみ」と呼び、水中に設けた隙間のある木や竹の堰です。転じてまとひつくものの意味もあります。実際は「柵」にとまどつていた蛇が抜けて泳ぎ去っただけですが、私たちの心を立ち止まらせませす。

月下美人一会の夜の息遣ひ

杉本葉王子

「月下美人」の純白大輪の花は、夏の夜に四時間ほど咲き、しぼんでしまいます。作者はこの花との出会いを「一会」と捉え、その芳香を「息遣ひ」と感受し、賛美を惜しみません。

紫に昏れて宵山灯の入る

渡辺 やや

祇園祭の宵山を詠んだものです。鉾町の鉾や山の提灯が次々と灯り、身動きできないほどの見物人でにぎわいます。工夫は「紫に昏れて」で、大阪の「天神祭」や東京の「神田祭」とも違う祇園祭独特の昏れ方が表出されています。

大賀蓮太古の風を生みにけり

吉永すみれ

「大賀蓮」は古代の蓮です。その見事な花の揺れを、タイムスリップさせ「太古の風を生みにけり」と讃えました。

梯子かけ西日剪りとる庭師かな

川田 好子

この頃の庭師の仕事は生い茂った庭木の枝を払うことです。風の通りもよくなり涼しげです。夕暮れ時の作業を「西日剪り」とる」とし夕日に映えた庭師をクローズアップしました。(以下略)

# 風土集



## 南うみを選

骨灰の付きしハンカチそのままに

水戸

山健太

娘の靴は紙の重さよ巴里祭

本立てをちよつと出てゐる団扇かな

虫干しの俘虜郵便を手の平に

裏庭に土用鰻のひつそりと

馬車道の名のいつよりや巴里祭

横浜

赤石梨花

雷鳴の下に小さく孤り棲む

羅や咀嚼ひそかに人老いぬ

移したる墓を晩夏の風わたる

逝く夏や凶鑑の魚は左向き

月下美人一会の夜の息遣ひ

京都

杉本幸子

遠蛙田水は富士の伏流水

方丈の廂を洗ひ夕立去る

一筋の蚊遣の煙座禅堂

製水の音ガラガラと遠きテロ

神々の賛歌大山蓮華咲く

伊東

吉水すみれ

正面に火の島据ゑて水を撒く

大賀蓮太古の風を生みにけり

万緑の吊橋渡る背負籠

急ぐ水急がぬ水も滝しづき

長口舌ビールの泡が消えてゆく

神奈川

石井秀一

金魚浮く寝てゐるのだと言ひ張る児

羅のマドンナに逢ふクラス会

落日に呼び止められて今日は夏至

日盛りを水族館の水の中

夏山やリュックに揺れる水の音

逗子

高橋まき子

木道の展望に座す夏休み

水槽のやうな空間赤とんぼ

擬宝珠の花の終はりを一つ摘む

まだ見えぬ滝に木の葉の震へをり